

# 内陸アジアの最古帝国に関する史学的研究から 持続可能開発のモデルを考える

Holotova Juliana

法政大学沖繩文化研究所 研究員

## 緒言 一研究の背景と目的一

紀元前3世紀から紀元後3世紀にかけて現在のモンゴルに当たる領土の中心を設立した匈奴族は国外の資源に依存していた遊牧民族であると思われていた。彼らは内陸アジアの最古の帝国を設立し、現在のモンゴル、北部中国、韓国およびシベリアの巨大な地域の支配者になった。

最新の考古学的発見・欧州の複数の言語そしてモンゴル、中国、日本の文献に基づいた筆者の研究では、匈奴族の複雑な経済と社会の制度というものが遊牧生活方式と共に定住性生活と建っていたことを述べ、匈奴族の文化を説明した。

平成14年からモンゴル、北中国と南シベリアで考古学研究を進め、匈奴族の最大の貴族墓地の一つを数年発掘していた間に、筆者はその匈奴族の独特な経済と社会の制度の特徴に注目した。

匈奴族は工芸品の生産に加えて、一方は東北アジアからアフガニスタンまで、他方は中国からシベリアまでの大規模な交易や文化交流ネットワークを形成していたのである。なお、筆者が数年前から行っていた比較考古学・環境考古学の研究では、匈奴族が、あまり知られていない能率の高い社会・経済制度により特殊な自然・経済的資源の管理を発達させたことが証明されている。

三島海雲記念財団学術研究奨励金のおかげで平成26年度の間この課題についてさらに深い研究を進めることができた。とりわけ巨大な匈奴族の領土の発展と資源のバランスを維持する方法の考察は主な目的で、匈奴族の制度を詳細に研究することは、現在人間が直面し、解決する必要がある地球規模の資源と環境の問題に貢献できるのではないだろうか。つまり「一方、人間・その快適さ・その発展と、他方、自然・資源を守ることは共存できるか」という課題について、古の文明が新たな解決の要素をもたらしてくれる可能性がある。

## 結果 一匈奴族社会と持続可能開発一

本研究のためには、アジアのいくつかの国（中国・韓国・モンゴル・南シベリア）における匈奴の考古学遺跡における発掘の筆者の長い経験から、あらかじめ匈奴族の国に関する多様なデータを収集した。このデータから環境、経済、社会、物質的な文化と対外交渉に関する重要な情報を分析し、本研究で匈奴族の社会の中で持続可能開発のいくつかの原則の存在を推定した。

### 第一 政治制度

匈奴族の国は、過去の独裁政治（帝国、王国等）とある現在国家の中央集権と異なり、独立国から結合した国だ。つまり、匈奴族の国は本格的な独裁帝国ではなく、その支配者はいくつかの分枝国の代表者として、その国々の利益を実行する人だ。各分枝国は自分の政治中心を持ち、生態と資源の要求が高い首都を造る必要がなかった。匈奴族の各分枝国が政治と行政のサービスを負担することは匈奴族の帝国に軽くてダイナミックな政治制度を与えた。そのおかげで、生態的に重い中心を建設しなかった。一方、国の行政で政治の能率が高かった、他方、統治機関と行政官庁の簡素さと軽さで環境保護と資源保存によかった。

### 第二 経済制度

各分枝国は第一次産業（農業、牧畜業、水産業、林業、狩猟業等）と第二次産業（製造業、鉱業と冶金術、建設業等）の分野で独立と自給自足であった。第三次産業の場合は各分枝国も遥かな国々と自分の交易を行った。

このような分枝国の自給自足に基づいた匈奴族の経済制度は全体の帝国の生態的なバランスを維持した。その柱は経済、生産と産業の平均的な分布であった。やはり低い人口の平均分布と共にこの制度は自然と資源を保存させた。

### 第三 領土の構成

匈奴族の低い人口は巨大な領土で居住した。したがって、支配者と行政機関の人数は非常に少なかった。この少ない人間は巨大な領土の支配と管理を行っていた。匈奴族はこのような状態で独特な領土の支配制度を作り出した。その基は能率的な運輸ネットワークであった。馬の畜産のみではなく、広くて速い不思議な道のネットワークであった。

モンゴル、北中国、韓国、シベリアなどの地形の特徴を利用しつつ、最速的な運輸を持つ国になった。このような組織の中で、国の行政と経済は連続的な発展を認めた。この柔らかく有効な領土の構成で匈奴族はシベリアから漢代の中国まで、中央アジアから韓国まで巨大な地域を他の国（中国等）のような環境に要求の高い施設がなくても支配した。

### 第四 支配の本質

匈奴族の国を結合した後、その帝国はより遙かな地域まで支配を広げた。紀元前7世紀にすでに国の中心地域の自然資源を枯渇させ、絶えず新しい領土を侵略したり、支配したりした中国と異なり、匈奴族は自然資源を破壊せずに、大規模な交易や文化交流と工芸生産の適度な発展を優先し、非侵入的な支配を行った。地域を侵略せず、植民地を作らず、ある場合に貢を貰いつつ、支配を行った。それより新たな地域と豊かな交易を発展した。古代から環境を破壊されている植民地の代わりに、相互の経済が繁昌していた状態を作った。

### 第五 生産の豊富さと生態バランス

過去の知識と比べて、新たな考古学発展で匈奴族のイメージは大きく変わった。以前に思われた現在モンゴル族のように遊牧民と騎手からもっと豊富な経済や町等を持つ国家の姿になった。匈奴族の遺跡は二つの種類に分けられる：墓地と城壁で囲まれた町と集落。その中と付近で様々な生産が行われた。基本的な農業、牧畜業、水産業、林業、狩猟業等（第一次産業）以外、大事な製造業と建設業が発展した。製造業は主に冶金、陶芸、織物、木器、石器等を含めた。建設業は町のことを除いて、100メートル以上の長さで20メートル以上の深さを持つ墓を認めた。その内、冶金術は代表的だ：青銅器、鉄器、銀と金製品の達人として、独特な匈奴族のスタイルを作った（図1、図2、図3）。1930年代から現在まで、大分な理論により、ある青銅器は中国から輸入された。



図1 匈奴族の装飾品、金とトルコ石、モンゴルにおいてゴルモド貴族墓地にて出土



図2 匈奴族の装飾品、金、モンゴルにおいてゴルモド貴族墓地にて出土



図3 匈奴族の馬の装飾品、金、銀と鉄、モンゴルにおいてゴルモド貴族墓地にて出土

2010年代行われた詳細な分析により、ほとんどの匈奴族の墓から出土された青銅器はいずれも匈奴族の職人に作られた。同様に、彼らは中国から輸入された絹以外に、他の蝶々の種類（*Lymantia dispar*）の繭で地元の

絹を作る可能性がある。同様に、モンゴルの匈奴族の墓で発見された地中で栽培された植物（穀類等）は匈奴族の経済発展が中国に頼ったという理論に反する証明となる。

つまり、匈奴族の国は政治と経済的に完全に独立で、自給自足な国家として、豊富な生産と交易で経済発展に相当高いレベルを達成しつつ、他の国と異なって、環境と資源を守った。

## 第六 交易、交通と交流ネットワークの役割

歴史の中で、匈奴族は彼らの交易と交流ネットワークを通して最初の本格的なユーラシアの面積で関係を持つ国になった。基本的に、匈奴族の領土は現在のモンゴル、ロシア連邦のブリヤート地域、中国の内モンゴルから山西まで、モンゴルとロシア連邦アルタイ山脈の地域を含めた。さらに、匈奴族はシルクロードの大事な地域新疆を支配した。この枠組みの外において巨大な交流ネットワークを作った。現在の韓国、朝鮮、満州、南シベリア、チベット、中国の中原とアフガニスタンまでの中央アジアの国々とダイナミックな交易を行った。交通手段として、生態を深く損害されず軽い駅（うまや）とより遅い駱駝、牛、ロバ等のキャラバンのような組織を發展させたと考えられる。

この交流の本質は現在のグローバリゼーション（全球化）と大きく異なった。現在のグローバリゼーションは、国々の文化の独特さを治まり、一様な世界を作るといった結果をもたらしている。このモデルに逆らった古代の匈奴族のネットワークは文化と地域の多様性に基づいた。一つのモデルを押し付けることの代わりに、匈奴族は支配者として各文化と国の特徴と特産を利用しつつ、各文化と地域を發展させた。

現在世界で広がっている社会と経済の一様なモデル（消費者社会）は資源、自然保存と持続可能發展を許さず、命に有害な以後の結果を持ってきている。匈奴族の多様性に基づいていたネットワークは自然から過度に取ること、資源を枯渇させること、地域から過度の輸出等を避けた。一つのモデルではなく、各国と地域は巨大なネットワークから利益を取りつつ自分の生態バランスを守っていた。

ユーラシアのフン族や新疆のサカ・月氏と言われる匈奴族に近い民族だけではなく、日本と韓国の古墳時代に墳墓の構成等に関して匈奴族の文化と共通点がある日本、アジア圏の国々の中において、類似の持続可能な開

発のモデルの存在のいくつかのポイントを見つけた。例を挙げれば、日本の古墳時代の経済制度は匈奴族の制度のように産業の多様性、国々（地域）の自給自足と遙かな所まで広がっていた交流ネットワークを發展させた。匈奴族は（新疆、チベット、四川等を含み）シルクロード、シベリアや草原の道を利用し、日本では貝の道、シルクロード、韓国と東シベリアの道が利用された。その結果は平安時代の文化豊かさであった。

## 考 察

上述の情報を総合すると、匈奴族の社会は中国と他の国より経済發展と自然資源保存のバランスを守ったと言える。この角度から、匈奴族の制度は持続可能發展の理想に接近した。匈奴族時代は（紀元前3世紀から紀元3世紀まで）現在の気候が厳しい草原より優しい（夏期と冬期の差がより小さくて、より暖かくて潤い）気候であった。現在の草原より森と様々な植生が豊かであった。このような空間で匈奴族の社会は、生活等モンゴル族の生活と異なった。主に生産の種類がより多かったのである。あの状況の中で、多様な生産で匈奴族の社会は生態バランスを維持した。

匈奴族は、経済發展と環境のバランスの中で、経済制度の本質のみでなく、経済發展の強さと速さも大事な役割を担った。相当速い、平衡な経済發展は長期的に貴重な結果をもたらした。發展の調整は気候の移り変わり、自然状況の影響で行い、あるいは社会の持続性を維持するために、一時的に経済發展を制限した匈奴族社会の内部管理の影響で行っていた。匈奴族の發展は両方の相互補完の影響も受けたかもしれない。

## 要約 —研究の意義と未来の研究—

アジアの歴史の中で極めて重要な役割を持っていた匈奴帝国の独特な制度は中国、韓国等の制度に大切な影響があった。この影響は日本まで広がった可能性もあると言える。それから、匈奴帝国のダイナミックで環境資源を維持させる経済と社会制度は現在のアジアの国々の持続的な發展に重要な意義を持っている。

この研究の結果に基づいて、将来は匈奴族の社会と経済制度の分析を通して持続可能な開発のモデルと、他文明における同類の国と、現在の環境問題に対する有用性を考えることができる。

この研究でモンゴルと中国において匈奴族の遺跡と文化遺産の保護に貢献できたと思う（主にモンゴルの

アルハンガイ州に於いてゴルモド遺跡、タミル川のいくつかの遺跡、ヘンティー州ツールリグナルス遺跡等)。

本研究の成果はスロバキア国立学院の国際雑誌において論文として公開する。その後、専門家に向けられている学会と一般の人々に向けられている国内と国際イベントで紹介する予定である。

## 謝 辞

本研究は公益財団法人三島海雲記念財団からの研究助成を受けて実施された。公益財団法人三島海雲記念財団および関係者各位には心より感謝申し上げます。

## 文 献

書籍

A. V. Davydova: *Иволгинское городище, Иволгинский археологический комплекс*, Fond Aziatika, 1995.

П. Б. Коновалов: *Хунну в Забайкалье*, ВКИ, 1976.

梅原未治：蒙古ノイン・ウラ発見の遺物，東洋文庫，1960.

*Xiongnu Archaeology—Multidisciplinary Perspectives on the First Steppe Empire in Inner Asia* (U. Brosseder, B. K. Miller eds.), pp. 425–440, Bonn University Editions, 2011.

雑誌

D. Tseveendorj Д. Цэвэндорж: *Археологийн судлал*, 1, 76–107, 1994.

乌恩：考古学报，4, 25–48, 2002.